

イムス札幌内科リハビリテーション病院

化したコースや横断歩道の模擬練習や脳トレなどマルチタスクコースも用意しており、季節を感じ、楽しみながらリハビリで

心して積極的な歩行練習を行うことができ、移動動作に自信を持つことが期待できる。同病院ではレール長を24㍍で、XYタイプでは国内最長の規模で設置している。

例えば、入院時、車いすレベルで歩行能力が低下している場合、ウエルウォーカーを用いて、体重免荷状況下で自身の歩き方を確認しながらトレッドミル歩行練習を行うため、歩行の再学習ができる。杖や歩行器を使った歩行ができるレベルの場合は、天井走行レール免

こうした設備と、質の高いリハビリスタッフの取り組みにより、最終歩行への到達日数は、自立歩行で中央値26・2日、介助・見守り歩行は38・0日、総合で30・7日となつており、それぞれ予測値に対し、2・4日、8・6日、3・8日短い日数で達成している。

また、重症者の歩行獲得については、重く重症者(FIM₁₈~54)251人のうち、歩行獲得者が88人(35・1%)、歩行自立者20人(7・9%)。中々最重症者(FIM₁₈~72)では、それ

達成感を得る▼心や体が肯定的に変化する—の5つの楽しさの要素をリハビリに取り入れている。昨年は47人の患者を対象に実施。今、できないことを問題とするのではなく、まず、これまでやつてみて楽しかったことや、これからやりたいことにについて患者と話し合う。「楽しいことなんて

在宅支援充実へ全床回復期に 重点項目設定し多職種で連携

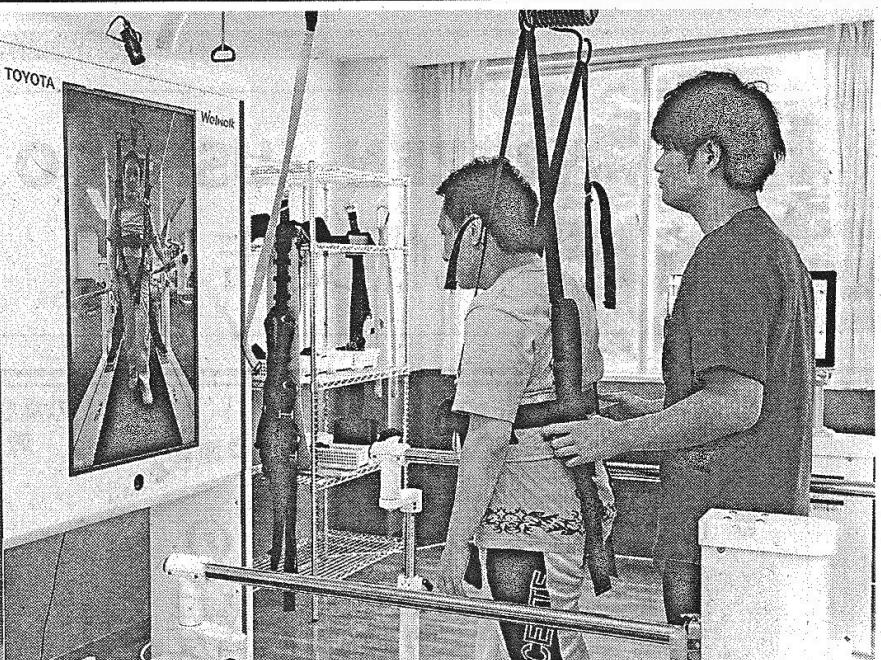
重点項目設定し多職種で連携

A black and white photograph capturing a moment in a hospital ward. Two women are the central figures: one on the left in a dark uniform, possibly a nurse, and another on the right wearing a striped shirt and dark pants. The woman in the striped shirt appears to be a patient, as she is being assisted by the other woman. They are walking through a room that is filled with various pieces of medical equipment. On the left, there's a shelving unit holding numerous items. In the background, there are overhead lights and a large window or glass partition. The floor features white markings, likely indicating patient pathways or room boundaries. The overall atmosphere is one of a typical hospital setting from the mid-20th century.

天井走行レール免荷システムXY型
の煙で採れた野菜をメニューに追加。患者と一緒に作って食べたり、それをきっかけに食べる意欲的になつたといふ。今年からは、全ての病棟で年4回、同様のイベント開催を目指している。

入院時に経管栄養等で食事が確立していない患者は3割前後。多職種アプローチで、その中の半数は何らかの形で食べられるようになり、さらにそのうち3割は3食経口摂取が可能となつた。

経口摂取は自宅復帰の目安にもなる。「口腔・嚥下機能も重要だが、限



リハビリ支援窗口ホットライン受付
WW-1000

測アルゴリズムの予測値よりも早く結果を出せるよう目標を定め、リハビリ計画を策定している。ここで活躍しているのが、各種最新設備だ。

ウエルウォームは、重度の片麻痺患者などの膝の曲げ・伸ばし動作をロボット脚で補助し、歩行機能をアシストするリハビリ支援ロボットで、道内でもまだ導入施設は少ない。天井走行レール免荷システムXYは、専用ハーネスを装着し、天井に設置したXY(縦と横)レールに沿って歩行練習を行う。バランスを崩しても転倒しないため、安

歩行レベルに合わせて活用している。病棟内を約半周程度歩行できるまで機能回復したら、屋外のピリカルで社会生活に必要な移動リハビリを行う。ピリカルは、広大な敷地面積を有効活用しようと造設したりハビリテーションパーク。イムスの頭文字I.M.Sをかたどった歩行路では、ゴムチップ、ウッドチップなどのほか、徐々に高くなつていく平板や丸太、飛び石など障害物が設置されたコースなどが用意され、さまざまな環境での歩行練習が可能。バランス練習に特

生きがいを感じる楽しさプロジェクトは、作業療法士がメイン。「退院後の患者を数多くフォローしてきたなかで、『身体そここく、精神うつぶつ』に課題を感じていたと丹野拓史作業療法士講長は振り返る。

作業療法士としてできることは何かを自問し、身体も精神もいきいきと楽しくなる要素は「楽しさ」だと考えたのが、プロジェクトの始まり。

道医療大の本家寿洋教授が考へた、▼過去・現在・未来に想いを広げて、人と関わる▼考える

「習いたかった」などやつてみたかつたけど、できなかつたことを引き出し、リハビリにつなげている。

これまでに、活動量の増加や活動満足度の向上、生きがい感における自己実現と意欲でプラスの変化が見られている。

増加傾向にある認知症患者については、院内にデイケア「ひだまり」を開設。認知症認定看護師を配置し、ここでもレクリエーションを通して、自分が好きなこと、楽しむことに取り組んでもらう楽しさプロジェクトを実施し、リハビリ以外の必要

◆ フォローの充実も図る。
□摂取の獲得を目指す。摂食嚥下リハビリの実施は、言語聴覚士を中心とした職種で取り組んでいます。

機会を1日1回でも持て
るようにするなど、工夫
していきたい」。
言語聴覚士はリハビリ
室、回復期リハビリ病棟
のほか、訪問・通所リハ
ビリなど、活躍の場が広
まっており、さまざまなか
形で「食べる」支援を進
めている。